

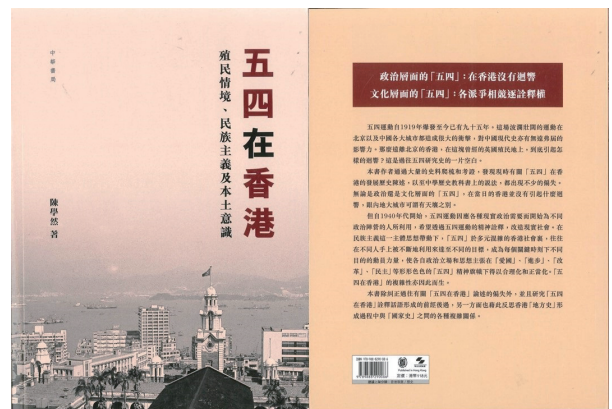
る（プリントできる分量には制限がある）。

「胡適檔案検索資料庫」と「胡適蔵書検索資料庫」は、「胡適研究」を展開する新たなツールであり、無限の助力を提供する。具体的な例として、胡適と魯迅・銭穆・殷海光・蔣介石の間の交流と論争などを取り上げ、この新たなツールを利用していかに「胡適研究」を深化させ、より深い歴史認識に至ることができるかを明らかにした。したがって、「胡適檔案検索系統」と「胡適蔵書検索資料庫」の公開は、「胡適研究」の分野の発展と深化に、必ず「無駄とはならない」作用と意義をもつだろう。

檔案資料の内と外——「五四」・「香港」を中心とする検討

陳 学然（香港城市大学副教授）

本報告は、主に、筆者が過去数年間におこなった「香港」および「五四運動」に関する研究成果をまとめたものである。ここでは、檔案資料あるいは檔案以外の中国語文献の新資料（たとえば日記・回想録・新聞雑誌・書簡など）がどのように利用され、どのような学術的成果が得られたのかを検討した。また、檔案資料をどのようにすれば十分に活用できるのかを自身の研究テーマに即して説明し、それが今後の現代中国研究、とりわけ香港を中心とする現代中国研究にどのような変化をもたらす得るのかを論じた。



報告は二つの部分からなる。第一の部分は「各おの其の是とするところを行う——「東南互保」と「両広独立」における各方面の政治的策謀」を中心とし、イギリスのFO・CO 檔案とそれ以外の書簡資料が、関連する研究領域にどのような補正作用を発揮するかを紹介した。本章を通じて、この二種類の檔案が既存の関連研究の限界をどのように補えたかを確認できる。また香港の初期の歴史的発展をめぐって、これまで知られていなかった重要情報や内部情報、各方面のめまぐるしい政治的角逐を反映した歴史的な糸口を描き出すことができた。たとえば、1900年の革命派、維新派、イギリスのロンドンの内閣、香港のイギリス官僚、満清政府、現地の督撫らの政治的策謀を解明できた。さらに、香港という小さな土地がはじめて各派が「各おの其の是とするところを行う」闘争の中で戦略的な位置を発揮したことも確認できた。FO・CO 檔案は非常に確かな参考価値をもち、香港イギリス政府が内地の政治状況に衝撃を受けた際に、どのような反応を見せ、どのように香港政府に対する内外それぞれ異なる衝撃の処理に着手したか、その異なる手法を伝えてくれる。

第二の部分は拙著『香港における五四——殖民状況・民族主義・本土意識』の内容を中心として、「香港における五四」に関する知識の誕生が、1997年の復帰という政治的要素の下で形成された一連の大国史観を起源とする、「中心」から「周辺」を見るレトリックに基づくものであったことを明らかにしようとした。関連研究の利用を通じて、中国国内の如何なる変動であっても、香港の政局の展開に重大な影響を及ぼしたのだと感じた。あるものはすぐに社会の反応を引き起こし、あるものは香港政府の厳しい管理によって制御されたものの、香港が、内地の政治の余波・衝撃を受けるだけでなく、実際には国内の文化的正統性が中心から外部に向けて不断に拡散していった地続きの場でもあり、さらには国内の左右分裂という政治闘争に連続したイデオロギー闘争の場であったことは容易に見いだせる。

さらに、本報告では「香港における五四」に関する既存の説を相対化することにとどまらず、歴史檔案、回想録、日記、新聞、書簡などを通じて「香港における五四」についての認識をあらたにし、どのようにより多くの視角を提供できるかを説明したい。またそれによって香港社会における国家アイデンティティの変遷史を観察でき、香港の都市機能や思想戦略上の位置をさらに深くかつ全面的に示すことができればと思う。

あわせて、私たちが大きな歴史の研究の中でさらに多くの地方史の個別の活力を発掘し、地方史の独自性と複雑性を示しながら、さらにそれによって相対的に「真実」に近い歴史発展の文脈を明らかにし、大國史観に存在する欠点を補正できればと思う。

未来を展望すれば、上述の研究は、私たちが香港という地域の「殖民性」形成に関する研究をさらに一步深めるための学術的な研究基盤を提供するものである。

第3セッションコメント

菅野 敦志（名桜大学上級准教授）

潘教授によるご報告では、「胡適檔案検索システム」および「胡適蔵書検索システム」の紹介について、一方の陳教授のご報告では、「檔案史料を用いることでいかに五四運動の新たな様相を見出せるのか」についてお話しいただいた。お二人のご報告を拝聴し、私からは「共通化」、「多元化」、「内と外」といった観点からコメントさせていただきたい。

潘報告からは、兩岸で進行中である、中国近現代史をめぐる学術協力の現状について知ることができる。中国文学／文化改革の旗手であった胡適だが、その胡適は、目下兩岸の学界において推し進められている歴史観の「共通化」、「多元化」という潮流の下、再検討が進められている民国史上の人物の一人であるといえる。この、胡適が中国現代史上において果たした役割と意義をめぐる「共通化」、「多元化」に関して、二つの質問を潘教授にお聞きしたい。

第一点は、「共通化」、「多元化」の政治的要素である。中国大陸の学者が胡適に対する過去の見方や評価を変化させていったなか、台湾の学界も同様に歴史観の「共通化」、「多元化」を進めていたといえるが、そうしたなかで、台湾の学界では胡適に対する見方にどのような変化があったのか。特に、戒嚴令解除後の台湾は3回の政権交代を経験したが、こうした状況の下で、中国大陸と協力して胡適検索システムを構築する際、何らかの困難に直面することはなかったのだろうか。

第二点は、胡適研究の将来的な可能性である。今後の胡適研究において、潘教授はとりわけどの方面においてさらなる研究が必要だとお考えだろうか。私個人の例を挙げさせていただくと、1950年代中期の台湾では、近代化を推進させる目的の下で、政府が簡体字の再公布を実施すべきか否かをめぐって「簡体字論争」が勃発した。当時、胡適はアメリカに滞在中であり、台湾を不在にしていたが、にもかかわらず、同論争では、文字／ピンイン／国語運動の改革に賛成する学者は、胡適の意見を持ち出すことで彼らの主張の正当性を証明しようとしていた。中国文化が改革されようとしていたあらゆる歴史的な節目において、胡適は常に重要な役割を演じていたといえるが、1949年にアメリカに赴き、1958年に再び帰台した、この間の胡適の学界に対する影響などについては、どれほどの研究の余地が残されているだろうか。

陳教授の刺激的な報告は、主に二つの研究成果の紹介によって構成されており、ともにFO・CO 檔案を用いることの重要性が説明されている。これらの檔案史料を用いた、五四運動の期間におけるイギリス統治下香港の再検討は、香港が経験してきた「五四」言説の複雑性を理解するうえで大きく役立つものである。そこで、今回のシンポジウムのテーマに合わせて、「内と外」をめぐる質問を陳教授にお聞きしたい。

第一点は、研究身分の「内と外」である。私が戦後台湾の文化政策と言語政策を研究し始めた際、外国人研究者という「外人」の身分であることが、政治的に敏感な議題である場合、むしろ第三者の立場でかわることを容易にさせると感じた。「内と外」をキーワードとし、香港研究に従事する際のそうした身分の「内と外」についていうならば、香港の学者と外国の学者は、どのような領域において自身の身分的な特長を発揮しつつ、研究対象の単純化を回避することができるだろうか。

第二点は、研究成果を紹介する際の「内と外」である。もし、歴史研究が現実の必要性に応じて求められるとすれば、歴史事実は常に利用される危険性に晒されているといえる。私は、日本の「辺境」とされる沖